

26PB-am183

血小板機能検査に用いる ADP 試薬の評価 (3)

清水 美衣¹, 服部 真奈¹, 松尾 昂法¹, 若菜 雅世¹, 山本 正博², ○原田 健一^{1,3} (¹名城大薬, ²横浜市立脳血管医療センター, ³名城大院総合学術)

【目的】最近、動脈血栓症発症率の増加に伴い、血栓症発症予防および二次予防のため抗血小板薬の薬効判定に血小板凝集能検査を利用している医療施設が増えてきた。しかし、本検査の測定条件は施設によって異なり、多施設合同の臨床試験は困難であった。本研究の目的は、血小板凝集能の標準化を目指し、各医療施設で用いられる各社 ADP 試薬の差異を明らかにすることである。

【方法】試薬としては ADP 凝集能試験で汎用されている 4 種の ADP 試薬 (MCM (M), アグリパック (A), クロノログ (C), adenosin-5'-diphosphate-SIGMA (S)) を用いた。検査および分析法は、血小板凝集能検査と親水性相互作用クロマトグラフィー (HILIC) を行なった。

【結果と考察】各メーカーの ADP 試薬を用いた低濃度血小板凝集能検査の結果、各試薬の血小板機能および分析結果ともに異なっていた。さらに、溶解条件によっても違った結果が得られた。特に、(C) の ADP は他の試薬と比較し凝集ピークがかなり低かった。このため (C) の ADP 含有量は他の製品より少ないのではないかと予想された。そこで、HPLC で分析を行なった結果、(C) の ADP のピークが他社の ADP 量より少なく、かつ新たなピークの混在が確認された。そのピークは ADP 凝集を抑制する物質 AMP と同定されたが、ATP の混在はなかった。したがって、ADP 試薬の試薬間差の原因は、ADP 量の差だけでなく、混在する血小板凝集抑制効果のある AMP によるものと推測された。今回の一連の実験により ADP 試薬のばらつきの原因を明らかにすることが出来た。